

書評

加藤政洋・大城直樹編：都市空間の地理学．

ミネルヴァ書房，2006年，304 p．

李 小妹・板場 敦子・宋 静雯

本書は、1970年代以降に進展してきた記号論、身体論、ジェンダー論、国家論、権力論などの視点からの新しい都市論と、1980年代以降に展開された空間論という二つの軸によって、都市空間論を概観し編んだものである。編者の加藤政洋と大城直樹によれば、本書の目的は、読者に概念装置としての「空間」の有効性と、もともと多様である都市空間を解説する手法や視点の新たな可能性を再認識してもらうことにある。

まず、本書の構成を紹介しておこう。本書は17名の執筆者によって作成され、「はじめに」を別にして、時期別にそれぞれ「都市論の胎動」、「街路の地理学」、「都市景観の解釈学」及び「ポストモダンの地理学」をあつかう4部に分かれている。具体的な章構成は以下のとおりである。

第Ⅰ部「都市論の胎動」

第1章「シカゴ学派都市社会学—近代都市研究の始まり—」山口覚

第2章「ヴァルター・ベンヤミン—^{フラヌール}遊歩者と都市の^{ファンタスマゴリー}幻像—」大城直樹

第3章「石川栄耀一人びとの生活と都市計画—」山田朋子

コラム1「モダン東京の〈不安〉をスケッチする—震災復興期・もうひとつの都市論—」

石崎尚人

第Ⅱ部「街路の地理学」

第4章「シチュアシオニスト—漂流と心理地

理—」南後由和

第5章「ミシェル・ド・セルトー—民衆の描かれえぬ地図—」森正人

第6章「デイヴィッド・レイとウィリアム・バンギ—地理学的探検—」原口剛

第7章「トルステン・ヘーゲルストランド—時間地理学—」西村雄一郎

コラム2「都市の体験」加藤政洋

第Ⅲ部「都市景観の解釈学」

第8章「ジェームズ・ダンカンとナンシー・ダンカン—テキストとしての都市景観—」今里悟之

第9章「消費と都市空間—都市再開発と排除・監視の景観—」森正人

第10章「日本の「ゲイテッド・コミュニティ」—監視される郊外住宅地—」吉田容子

第11章「日本における景観論／風景論—学際的な議論の構図—」西部均

コラム3「都市のイメージと頭のなかの地図」大西宏治

第Ⅳ部「ポストモダンの地理学？」

第12章「アンリ・ルフェーヴル—空間論とその前後—」南後由和

第13章「デヴィッド・ハーヴェイ—社会・空間のメタ理論—」和泉浩

第14章「クロード・ラフェスタン—「領域性」の地理学—」遠城明雄

第15章「ロサンゼルス学派—現代都市像の再

構築— 長尾謙吉

第 16 章「フェミニスト地理学—ジェンダー概念と地理学—」 影山穂波

コラム 4 「「低開発国」の都市論」 遠城明雄

コラム 5 「「モーター・シティ」の音楽シーナーラップ・バトルとデトロイト・テクノ—」

山口寛

まず、各章の内容について紹介し、それから批評していきたい。

第 1 章では、近代都市研究の始まりとも言われるシカゴ学派による都市社会学の研究手法や成果が紹介されている。移民社会シカゴで、シカゴ大学の研究者らが社会事業を含む形で都市社会学を発展させたのがシカゴ学派の始まりである。シカゴ学派内部では、統計的研究が主な学問として確立される一方で、質的データを重要視する民族誌的研究も存在し、「統計対事例」という論争が存在した。近年の再評価は中でも都市民族誌に対するものが大きい。山口は、シカゴ学派の研究を再評価することに現代的な意味と、社会的多様性が深化している日本への応用可能性がある指摘している。

第 2 章では、『パサーージュ論』を中心にヴァルター・ベンヤミンの著作を引用しつつ、彼の都市論的思想が論じられている。また、ベンヤミンに影響を与えた 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて活躍していた人物及び彼らの著作や思想についても紹介されている。その中では、アメリカの小説家エドガー・アラン・ポーの『群集の人』とシュルレアリスムの代表作であるルイ・アラゴンの『パリの農夫』を、当時の都市社会に起きた出来事に照らしながら、文学的な手法を用いた都市表象の解読プロセスとして見せている。そして、ベンヤミンの思想が、19 世紀の都市及びその歴史の脱構築の解読プロジェクトであると、大城は主張している。

第 3 章において、山田は、都市計画法が制定さ

れた 1920 年代から 50 年代末までの数十年の間に繰り広げられていた都市計画の実践経緯を追いながら、石川栄耀の「人道主義の都市計画」思想を紹介している。山田によれば、盛り場をキーワードに扱う石川の大都市主義的思想及び実践は、日本都市の持つ自然・地形・歴史・文化などの特性と欧米の都市計画技術との融合、また都市計画家の視点と市民の視点との融合によって特徴づけられている。山田はまた、その都市計画実践に都市計画を超える学問的意義が見られ、現在の都市計画者や都市住民にとっても生かされるべき考えであると、石川の都市計画思想を高く評価している。

第 4 章において南後は、1990 年代以降に蓄積されたシチュアシオニスト研究を踏まえながら、シチュアシオニストの主宰者であるギー＝エルネスト・ドゥボールによる「心理地理学」や「漂流の理論」など「レトリスト・インターナショナル (1952-57)」時代の理論を中心に紹介し、シチュアシオニストの地理学的実践の解説と再評価を行っている。南後によれば、ヨハン・ホイジンガやルフェーヴルやガストン・バシュラールなどの思想家の影響を受けたシチュアシオニストは、都市空間の商品化及び消費の日常生活への浸透に抵抗しようとし、街路を「漂流」する手法で「既成の空間編成に亀裂を入れ、組み換え」、自らが都市の再構築に介入していた。また、「都市の『正しい』読み方などないという立場に立つ」シチュアシオニストの心理地理学的理論と実践は、シュルレアリスムやミシェル・ド・セルトーやヴァルター・ベンヤミンなどの言説との間に理論的接点が見られる一方、それらの言説よりも批判的で広範的でダイナミックであるため、「錯綜する都市」の解読に「多くの生きるヒントを与えてくれる」と南後は指摘している。

第 5 章では、ミシェル・ド・セルトーの思想が全般的に紹介され、従来地理学で注目されている①高所からの計画や視点、②消費や読解の詩学、③戦略と戦術といった理論にとどまらず、ド・セ

ルトーの思想を統合的に理解する必要があると強調されている。森はまた、ド・セルトーがフロイト、フーコー及びピエール・ブルデューから影響を受けつつも彼らの思想を批判的に分析することによって、「抵抗」、「空間的实践」および「戦術」などの概念を独自の理論へと再構築したと評価している。そして、ド・セルトーの戦術という考え方に対する批判を分析することによって、その思想を所与として目的論化するのではなく、自身の実践において掬い上げねばならないと、森は示唆している。

ジェームズ・クックの「南方大陸」探検への言及から始まる第6章では、二人の地理学者、デイヴィッド・レイとウィリアム・バンギが行った現代都市の探検に対してその意味をあらためて問い直している。二人の地理学者は黒人コミュニティに向けられる偽りのイメージを払拭し、黒人たちの異議申し立てにそれぞれの形で応える試みを独自の方法で模索した。レイは、日常生活の側から都市空間をとらえる可能性を示し、一方バンギは、デトロイト・フィッツジェラルドの過去・現在・未来を詳細に再現し、抽象的・数理的思考に注意を払いながらも、生活のスケールを視点に置き、グローバルなスケールの問題を捉えることの可能性を示した。原口は、二人の方法論を改めて評価する一方、「探検する側」「される側」の関係性からも、「探検」の意味が対話の契機を作り出すことにあるべきだと示唆している。

第7章は、ヘーゲルストランドが提示した時間地理学の概念と理論および1980年代以来多くの研究者による理論的展開と批判について紹介している。西村は、ヘーゲルストランドの分析が個人の日常生活の時空間的特性を捉えるのに、「能力の制約」、「結合の制約」と「権威の制約」といった三つの制約を分析装置として利用することで、人間生活の個別性と普遍性の両者を踏まえたものであると指摘している。ヘーゲルストランドの分析は、多様な理論的展開と研究及び社会的功績を

導いた一方、時間地理学に強い「社会科学的男性性」が見られるというようなフェミニズム研究者からの批判を含め、様々な批判をも受けた。現在、時間地理学がITの浸透によってアップデートされ、また同時にその視点にある男性性を克服する新たな概念提示が行われ、依然として社会生活を分析するための重要なツールであるにもかかわらず、個々人の経験や生活の質に対する見方及び時間地理学の概念それ自体に多くの検討すべき課題が残されていると西村は示唆している。

コラム2において、加藤政洋は第I部で紹介されたベンヤミンの思想と第II部のド・セルトーの理論を回顧しながら、それぞれ第III部と第IV部で議論されるロラン・バルトとアンリ・ルフェーヴルの思想を統合的に検討している。このコラムは4部16章からなる本書の各章における理論的関連性を示唆する。

第8章では、ジェームズ・ダンカンとナンシー・ダンカンの景観論を紹介している。彼/女らは地理学の伝統的な方法にロラン・バルトによる記号論的な要素を加えることによって、「テキストとしての景観」を主張し、新たなテキスト論を展開したという。今里によれば、ダンカンらの視点には、①農村地域や先住民地域を対象として扱う伝統的な景観論や文化地理学と異なって、都市を対象にし、そこに隠されたイデオロギーを見出そうとする；②テキストとしての都市景観は流動的であって、人々の多角的な解釈や意味付けによって対抗空間につくり変えられている；③生活環境全般における都市景観とその他のテキストとの関係性にも注目する；という三つの特徴がみられる。現在の地理学の理論的な流行はテキスト論から身体論や記号論へと移行しつつある。しかし、テキスト論は解釈されないままやむやみになってしまった課題が多く、私たちがチャレンジできることは案外たくさんあると今里は指摘している。

「消費と都市空間」をあつかう第9章においては、都市再開発やジェントリフィケーションの事

例を用いて、都市空間における消費やライフスタイルとの関係性が論じられている。社会学者シャロン・ブーキンと吉見俊哉の議論を中心に、ニューヨークのマンハッタン地区でのジェントリフィケーション問題や公共空間の民営化問題および都市空間のディズニランド化やテーマパーク化について論じたうえで、近代の都市空間が資本との間に人々の消費欲をかき立てるような、つまり明瞭かつ直接的な関係性をもつと、森は主張している。

第10章は、アメリカのゲイテッド・コミュニティの事例を参照し、日本で誕生している郊外型ゲイテッド・コミュニティの分析を行っている。外部からの遮断によって守られている存在である住民は、一方で商品価値の高い住宅の住民であり、常に商品の宣伝という外部からの視線にさらされるという矛盾があると吉田は指摘する。吉田によれば、ゲイテッド・コミュニティは「家族を守る」というマスキュリティ（男性性）が、都心に通勤する男性の代わりに発揮される空間であると同時に、侵入者から町を守る監視が同時に内部者への監視（保護）を可能にしたジェンダー化された空間でもあるという。それに加えコミュニティは、外部からの遮断と視線が同時に存在するという矛盾を抱えている。

第11章では、地理学における景観論に焦点をあて、近代日本において景観論／風景論が盛んになった時代と変遷が紹介されている。観光バスでの見学旅行というたとえ話を通じ、「景観」の3要素「物質—見ること—イメージ」により「景観」という概念を提示する西部の記述が面白い。ここでは、外界に物質を、内面にイメージを、そしてこの両者を連結する位置に「見ること」を位置づける。水が流れ、落ち、よどむ変幻自在な姿に、人の生死の運命などといった人間の本質を読み取る「物質的想像力」には景観論／風景論がいつくか存在するという段落は興味深く、ある種の哲学思想を含んでいる。風景は古くは絵はがき、今は

ポスター、ブラウン管などにあふれ返っている。しかしこのような時代にこそ、新しい時代を生きるための知恵を景観に見出すための、私たち自身の想像力の飛躍が期待されていると最後に西部は主張している。

第12章は、「空間論的転回」を触発したフランスの思想家のアンドレ・ルフェーヴルとその思想を紹介している。空間論を中心に、「日常生活批判」や「都市論」から「空間の生産」論に至るまでの諸理論とその相互連続性と、その後展開された「国家論」および未完成の「リズム分析」に関するルフェーヴルの思想経緯を統合的に提示している。また南後は、ルフェーヴルの諸理論の思想的連続性をヘーゲル、マルクス、ニーチェなどの思想及び構造主義との連関に求める。南後によれば、ルフェーヴルは、ヘーゲルの「弁証法」と「疎外」の理論やマルクスの「唯物弁証法」と「生産」の概念などを自らの「空間性の三元弁証法」的空間論に展開したのみならず、晩年に行われたリズム分析においてマルクスとニーチェとの思想的接点を見出した。最後に南後は、ルフェーヴルの空間論を用いる際に、図式化する危険性と、射程の延伸やスケールの多元化といった理論展開の可能性があると指摘している。

第13章は、デヴィッド・ハーヴェイのモダン／ポストモダン／都市に対する考えを、彼の著書『ポストモダニティの条件』（1989）を主な研究対象とし分析を行っている。ハーヴェイによれば、ポストモダンと称される変化は史的唯物論で理解することができ、マルクスの資本主義理論で理論化することができるという。またマルクスの政治-経済システムとしての資本主義的生産様式の中に地理的要素が不可欠だということも指摘されている。彼はポストモダンの文化的な諸実践の表れに対して、資本主義に内在化されている「時間-空間の圧縮」が過剰なまでに進んだ結果であり、決して新しい現象ではないとし、ポストモダン論者に対して否定的な立場をとっている。また彼は、

現象や地域を捉えるときその過程が重要であり、その過程が生じるのは資本の循環という統一の原理の存在があるためであると主張する。最後に和泉は、ハーヴェイの主張に対し、その理論構築上の問題点と、ハーヴェイの史的・地理的唯物論弁証法が自身の研究においてどれほど反映されているかという問題を提起している。

第14章において、遠城はラフェスタンが創造した「領域」、「領域性」、「領域化」および「領域の生態生成」といった一連の概念と関連理論を整理した上で、こうした領域性の構想が「幾何学的概念とその手法」と「マルクスの労働過程論やフーコーの権力作用の考え方」を「歴史性と社会性との関係のなかに位置づけなおし新たな意味内容を付与することによって、社会と領域の関係性とその動的な変化に焦点を当てた批判理論の構築を目指したものである」と論じている。また、「自分自身を他者性と外部性の関係性のなかでつねに変化するひとつの動的過程として認識することが必要である」と主張するラフェスタンの領域性の地理学は「別の近代性」の可能性を探究するひとつの試みとして位置づけることができる」関係論的構想でもあるという。さらに、ラフェスタンの関係論的構想が批判と再構築に開かれた状態にあるため、たくさんの興味深い検討課題を提供してくれるだけでなく、わたしたちに学問的かつ社会的コンテクストを批判的に読むことを要請していると遠城は指摘している。

第15章では、1980年以降のロンサンゼルス学派による現代都市空間の再構築の試みが紹介されている。長尾によれば、1980年代においてアメリカ合衆国の都市研究がその中心をシカゴからロサンゼルスに移動した理由は、代表的な研究者の共通の意識にも見られるように、あらゆるレベルで急激に進行した都市再編にある。長尾は、ロサンゼルス学派の研究が社会と空間との弁証法的関係性および社会・経済活動の空間性に大きな関心を向け、「空間論的転回」において中軸的役割を

果たし、また同時に「都市の空間的再編を通してグローバル化を問うための見取り図を準備した」と主張している。

第16章では、まず歴史学者のスコットとジェンダー研究者の館かおるによりながら「ジェンダー」の概念が再整理される。そこから、影山は、3つの立場（①女性の地理学、②社会主義フェミニスト地理学、③差異に留意するフェミニスト地理学）を導き出して、地理学における研究の変遷をたどり、その動向について論じている。女性を対象とする地理学研究が登場したのは1970年代であり、女性を可視化することが、「女性の地理学」の目的であった。しかし一方で、フェミニスト地理学研究は女性間の差異に留意していたものの、人種の問題が目に見えない。そのため階級や人種といった問題も同時に検討する必要があると影山は指摘している。またこれまでのフェミニスト地理学では、いかに都市が女性を制約し、不利益を与え、抑圧しているのかについて検討されてきたが、最近では、都市空間が女性を解放する可能性についても論じられるようになったという。

以上のように、本書は都市空間研究の歴史をその代表的人物と思想、重要な理論的展開と新たな視点を時期別に追いながら概観した著書である。時間的スパンにしても議論の拠点となる地域的範囲にしても今までなかった幅広い著作といえる。時間的には、1920年代のシカゴ学派から今日のグローバル都市論まで、議論の内容と地域の範囲に関していえば、パリからシカゴ、そしてロサンゼルスから東京を拠点に行われてきた都市論のあらゆる視座（記号論・身体論・抵抗論・国家論・ジェンダー論・景観の解釈学）をほぼ漏れなく紹介していることや、それに対する若手地理学者による理解と解釈が反映されていることは興味深い。地理学を学ぶ学生にとっては、地理学の広範囲な分野での可能性を示唆してくれる内容となっている。各章にはまた読書案内が収録されているため、より深い研究の手がかりとなる貴重なテキ

ストでもある。

しかしながら、膨大な議論が限られた紙数で行われているせいか、解説や注釈などの情報が中途半端になりがちなことによって、分かりづらいという難点がある。たとえば、スコット、ソジャ、サッセン、カステルの理論については、第15章でロサンゼルス都市研究にうまい具合に組み込まれているものの、全体を通して読んでみたときに、彼らのそれぞれの理論の理解につながりにくい。また、横の情報量が多い（ロサンゼルスを扱った多くの理論に触れていること）わりに、縦の知識や情報が乏しい（たとえばソジャの「社会—空間弁証法」という概念が何度も言及されているが、それについての詳しい説明や解釈は全くと言えるほどない）という印象を読者に与えてしまう。

これほど幅広く興味深い論集であるからこそ、さらなる注文をしたくなるのかもしれない。評者の身勝手を承知でそれらを挙げれば、スコットやソジャの理論をより体系的に詳論してほしかったし、カステルやサッセンなどのグローバル都市の議論を含めたグローバル化・新自由主義化する都

市空間の分析や、ドリーン・マッシーの空間論的思想などが加われば、さらなる空間論の広がりや可能性を示すことができたことだろう。あるいは、第10章で紹介されているゲイテッド・コミュニティの議論は、ジェンダーの視点だけでなく、日本社会で進行する階層化などの視点からも捉えられたかもしれない。新たな都市空間論から日本社会を分析することで、西欧中心的な学問に対抗する新たな地理学の可能性を模索することが可能となるのではないか。

しかし、そうとは言え、都市空間をあつかう論文集として、本書はやはり、現代の地理学の潮流をリードする一作であることは間違いない。都市空間研究を志す研究者や学生にとって価値の大きい必読の著書と言えよう。

り・しょうめい

いたば・あつこ

そう・じんうえん

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻地理環境学コース